

エッセイ

私の人生

徳増 公明

3. 濱田明夫氏を偲んで

日本ムスリム協会理事 徳増公明

濱田明夫氏が12月14日逝去されました。享年95歳。

お世話になった濱田さんを偲んで、申し上げます。

濱田さんは日本ムスリム協会の顧問として長年指導してくださいました。

私たちが大変お世話になった大先輩です。

改めて、ご家族の皆様に哀悼の意を申し上げます。

濱田さんが最近、健康を害されたと聞いていましたが、突然の訃報に驚きました。

クルアーンでは「誰も皆死を味わう」と述べられていますが、残念でなりません。

濱田さんが来世、きっと楽園に入れるようアッラーに祈ります。

さて、公私にわたってお世話になった濱田さんについて少しお話してみたいと思います。

濱田さんはエジプト政府の官費留学生として1957年にカイロのアズハル大学へ派遣された一期生（2名）です。1962

年に二期生（8名）1965年に3期生（6名）と続きますが、3期生の私は濱田さん始め諸先輩、同期生との交流が始まり、それ以来一生の友として付き合うことになります。カイロ時代は、お陰様で楽しく有意義に過ごすことができました。1973年に帰国した濱田先輩に相談して、彼が勤務していたアラビア石油に入社することができました。

濱田さんは1981年の湾岸戦争の時、人質だったアラビア石油の社員だった6名の開放を求めて、アラブの旧友だった有力者に連絡を取ってくれていたようでした。

戦争の危機を乗り越えるためカフジの住民は戦果を畏れてサウジの各地に避難していました。

会社は操業に必要な47名の日本人従業員を除いて避難させました。一方、濱田さんは会社の特使としてサウジアラビアへ飛び石油省のアブドルカリーム官房長官に会いカフジの日本人47名の撤退も求めたのですが、利権協定によって許されませんでした。しかし開戦の日時を知らせるとのことでした。ダンマンに駐留している多国籍軍がいつ攻撃を開始するかわからない不安は募る一方でした。

国籍軍の攻撃について、アブドルカリーム氏曰く「攻撃の前日にカフジに伝える。明日10時に連絡したいことがあると電話す

る」とのことでした。開戦日を暗示した電話だったのです。浜田氏はそのことをカフジの責任者へ伝えました。会社は太いパイプラインを使って地下にシェルターを作りイラクの攻撃に備えていました。

1月16日、官房長官から電話がありました。お陰で日本人は全員防空壕に入り、飛んできたロケットの難を逃れることができました。そして、ダンマン、リヤード経由でジェッダまで移動し、帰国しました。リヤード事務所に赴任していた私は彼らの無事を願いつつ見送ったことを思い出します。

濱田さんとムスリム協会との関係については彼がカイロから帰国してから今日まで続きました。代々木にあったムスリム協会が資金不足で事務所の維持ができなくなった時、当時アラビア石油総務部長だった濱田さんが会社の責任者を説得して資金の援助をしてくれて助かりました。

監査役になった株主総会での濱田さんの話は雄弁で説得力がありました。定年後も協会の顧問として指導していただきました。

晩年は個人的に度々電話して協会活動のことを報告しアドバイスをいただきました。

一か月程前に、体調を崩され、先が短いと弱音を吐かれ、心配していました。

また電話の度に、俺がこの世から来世へ先に行くから、アミー
ンは俺より先に行かないで欲しいと言ったことを冗談のつもりで
聞いていました。人の運命は誰もわからないけれども、実際のそ
の通りになってしまいました。長男の秀明さんから訃報を知らせ
る電話があった時は驚き悲嘆にくれました。敬愛する濱田さんの
逝去にアッラーの祝福を祈るしかありませんでした。

葬儀は代々木上原の東京ジャーミイで12月16日に行われま
した。

参加者は生前彼が希望した通り、少人数の家族、親族中心の約
10名でした。午前9時に始まり、10時に協会の森伸生理事、
柏原良英理事によるグスル（洗体）があり、10時30分頃、東
京ジャーミイのイマームによるサラート・ル・ジャーナーザ（葬儀
の礼拝が）がありました。男性たちの手による遺体出棺があり
11時頃、塩山市にあるムスリム協会の墓地に運ばれて行しまし
た。

小生は健康上の理由で、残念ながら見送って家に戻りました。

遺体は親しかったムスリム協会元会長の樋口美作さん、元理事
の武藤英臣さんのすぐ近くにされたとのこと。今頃3人で仲良く
現世の思い出を話合っているだろう…。私も将来、皆さんの所へ
行きますので、よろしくお願いします。

インナー リッラーヒ インナー イライヒ ラージウーン

「彼（アッラー）の御許に私たちは帰ります」。

改めてご家族、親族の皆さまにお悔やみ申し上げます。



会社の松濤寮でのアラビア石油総務部懇親会(渋谷) (前列右から4番目が濱田氏)

4. G7広島サミット後の期待と課題

G7広島サミットが2023年5月19日～21日まで広島で開催された。議長国である日本の岸田総理はG7首脳に加えて「グローバルサウス」と呼ばれる新興国・途上国の首脳たちを招待し、主議題①法の支配で結束する②グローバルサウスと連携する③核なき世界に道筋をつけるとの議題を中心に会談を主催し、最後に議論の成果を公表することができた。また、会談前に岸田総理は首脳たちを原爆資料館を案内し原爆投下の悲惨さを伝えることができた。この惨たらしい光景に首脳たちは原爆がもたらした破壊的現実の姿を見て、異口同音に二度とこんなことがあってはならないと述べた。その一方で、核保有国やその傘に依存する国は自己防衛のために核を所有しなければならないと述べたり、この矛盾した発言に批判的な声も上がっている。核廃絶を訴える日本はアメリカの傘の元にあって、核不拡散条約にまだ加入していない。

核戦争になれば地球は破滅し人類が全滅してしまうと言われて
いる。それなのになぜ、政治家たちは自国の経済的利益のためになることしか考えないのか？ 人の生命を最優先の上、武器を使う戦争を禁止し、平和な世界のために尽力しないだろうか？ 国

家間で分断・対立した場合、武力ではなく協調し合って話し合いで解決しなければならない。そのためにG7首脳・グローバルサウス首脳、他の大国首脳を加えた中立的な国連の役割が求められる。今後、日本政府は核のない平和な世界実現に向けてリーダーシップを発揮して欲しい。(5月22日の朝日新聞朝刊を参考に)

徳増